
雨月綺譚

栴村稲穂

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨月綺譚

【Nコード】

N0086B

【作者名】

枷村稲穂

【あらすじ】

全て物語には不明の未来があり、進行形の現在があり、そしてなにより今まで歩いてきた道程たる過去がある。何者も過去からの逸脱は免れず、それ故人は成長と悔恨を望む。

NIGHT 0 Restart

魔術。

神話の時代に端を発する異能は、
途絶えることなく連綿として継承されてきた。

それを扱う者共もまた滅びることなく、
その歴史を血道とし永劫を歩んできた。

しかし。

一九四五年に終結した世界大戦は、
この常軌を逸した世界にまでその影響を与え、
磐石のものであったはずの歯車を
半ば強引に、半ば必然的に、
廻すに至った。

そうして一九四七年・三月十二日。
半世紀の後まで続く魔術、異能、奇妖の全てを巻き込むある戦争
が始まった。

阿鼻叫喚の地獄絵図ともいうべき争い。
それは誰に気付かれることも無く、始まり……
終わった。

一九九六年、終戦。

旧きは星霜を閲した神代の魔術、
新しきは一九世紀より始まった近代魔術。
学派の悉くが、塵滅され、再出発を余儀なくされた。

多くの魔術師達は闘争の意義すら見出すこともままならず、
それ故、

—— 戦争の終局点とも言うべき

極東の弓状列島は未だ、

混沌のまま放置された —— …

0

夜。

学校。

土塊人形。

「狂ってる……」

目の前の情景は異常極まりない。

一般人が見たら何と言っただろうか。

誰もいない校庭を這う土のヒトガタ。

ぐしゃぐしゃ、と足音のみが夜の静寂を侵す。

その動きは緩慢だが、蛇にも似た恐怖を喚起させるものだ。

「……………」

しかしその大きさは蛇の比ではない。

見上げるような高さの泥人形は赤ん坊のように四つん這いにこちらへと歩み寄ってくる。

ゴーレムのつもりなのだろうが、これではゲームのままである。

師もふざけた真似をしてくれる。

しかし、そのふざけた外見とは裏腹に、土塊には十分過ぎるほどの力で満たされているのだろう。

五感が鎖されていて、その、息が詰まるほどの圧迫感ですぐ分かる。

これが爆発しただけで、校庭に直径百メートルの穴ができるだろう。

およそ人体の持ち得ない量だ。

尤も、その大部分は仮想の生命を動かすために割り振られているが。

「取り敢えず、頭を潰すか……」

ヒトのカタチをしている以上、頭を破壊すればそれなりのダメージが望める。

そう思い、走り出す。

二十メートルの距離を三秒と掛からず踏破、一気に間合いを詰める。

同時、肉体とは別の「殻」と「核」を励起する。

刹那の間を空けず魔術式脈がシナプスの如く脳と大魔術炉を接続。座を経由して、節を運用。

式脈は流路と化し、魔力が駆け巡る。

指とともにそれを握り締める。

的は近い上に大きい。

狙いも定めず、擦れ違いざまに一気に放つ。

轟、という空気の唸りとともに不可視の砲弾が宙へと走る。

左と右の側頭部に着弾。

バフツ、という乾燥した音とともに砂煙が舞い上がった。

「……………」

土塊は動きを止めるが、それも一瞬。

支点は両肘両膝から両手両脚へと移り、体がゆっくりと持ち上がる。

あまりの高さに視界から月影が失われた。

ぞろぞろと蠢く土の体は、四足獣さながらのカタチへと変貌を遂げる。

その間、僅か二秒。

ぐつと踏み込み、弾ける。

匍匐などではない、四足の疾走。その動きは正しく獣のソレだ。

—— どうやら俺の当ては外れたらしい。

無頭の獣が駆ける。

「チツ……」

今までの動きが嘘のような速度の突進。

アレに押しつぶされたら間違いなく内臓と骨が潰れる。

時速五十キロ超で動く土石流の中を誰が生き得よう。

身を捻って右へ大きく踏み込み、跳躍。

十五メートルを優に超える高さを跨いで回避する。

その間にも再び左の拳を握り、今度は甲に紋を刻む。

記号にも似た紋はしかし、その実三画のみで構成された文字であり、俺にのみ許された魔法陣でもある。

光を放つ掌を開き、叫ぶ。

「W i o r r d e , S l a s t z e 風よ、刃となれ!!」

この世で何処にも使われていないその言葉は魔術師だけが詠う。極端に圧縮されたその言葉、その韻はもう一つの体を喚起する。

二小節の魔術は即座に展開し、効果を発揮。

先刻の弾とは桁違いの力を込めたそれは現実を侵食して、不可視の壁を突破する。

翠墨色の刃の数は十五。

月夜に舞い映えるその光は雷。

土塊へと殺到し、その身をバラバラに切り飛ばす。

切断面から沸騰し、異臭とともに蒸発する……はずだった。

切り崩された土の切断面が不気味に点滅する。

赤い、土。

紅い、泥。

赫い――、

「、第五要素エリクシル……!」

信じられない。

師は、錬金術の粹を惜しげもなく使い捨てている……!

解々の身体のそれぞれが、周囲の土を喰らい、己が内に取り込んでいく。

他存在を自身の大魔術炉の燃料にする―― 錬金術の基本原理に

則った当然の行動。

畜生。

カバラなんて師のガラじゃねえと思ったら、錬金術か!

毒吐き、大急ぎで走り出す。

カバラの秘儀が大規模性を危険視されるなら、錬金術はその多様性ゆえ畏怖される。

だからこと戦闘において、魔術は可能な限り距離を開けて攻略方

法が見つかるまで逃げるのが定石。
少なくとも俺の中では。

「ふ…！」

グラウンドの斜め五十メートルを三秒で走破する。

背後では質量を増した各々の土塊がそのまま十匹の狗となって統率された軍隊のように突撃を開始。

狗、といってもその体は馬より大きい。

それを圧迫感と共に感じながら、頭の中では知識を廻らせる。

狗。錬金術。土砂。

要は三題噺と同じだ。

関連のある事項から一つの話を見出し、その後に解決策、突破口を求める。

魔術という怪しいモノにも拘らず、その感覚は数学問題の証明する時に似ている。

そして今回は――

「……エジプト。原型は大狗審神アヌビスか砂漠偉神セトあたりが妥当だな」

直観比率、三対七の割合で後者の方が強い。あの気性の荒さは砂嵐に通じるものがある。

背後からの圧迫は狗どもがもう、すぐそこまで来ていることを知らせている。校舎まで後十メートルもない。

「よ、とー！」

圧縮した空気の塊を硝子窓にぶつけ、そのままスピードを落とさず化学実験室に飛び込む。

破凜、と硝子が割れる派手な音が夜の静寂を引き裂く。

右脚で実験台を弾いて強引に方向転換し、準備室へ直線に駆ける。薬品臭い準備室を通過しながら、媒介になりそうなアルミ箔とボ

トルごと塩酸を掻つ攫う。

使えるものは何でも使う。

理科館の廊下はそれほど長くない。ましてや一階は化学実験室と技術室しかないのだ。迎え撃つには分が悪い。

「……………」

砂漠偉神セトの弱点といえば、隼空王神ホルスだろう。

隼空王神ホルスは叔父との八年にも及ぶ戦いの果て、左眼を犠牲に勝利を収める。

しかし俺としては左眼を犠牲にするのはごめん願いたい。

何せこの左眼は俺にとって唯一無二のアドバンテージなのだ。

コレを失くしたら俺はそこいらの凡百な魔術師と同じになるし、元よりこんな危険を冒す必要がなくなる。

だからといってこのまま延々夜が明けるまで走り続けるなんて不可能な以上、何か策を打たねばならない。

師は意地こそ悪いが、卑怯ではないのだ。

最低でも一つは突破口を用意してくれている。

あーでも、嘘の解答三十個くらいまぜたことがあったな…。

「ま、物は試しに……………」

意識の一割を疾走に載せ、それ以外全てを自分の内面に向ける。今度の呪文はちよつと長い。

「R i v e n t E l s g o t t Q u i x f i e l a m , X
e d s 転換、卑金と酸は青き水に。爆散！」

自分の背後三メートルを駆けるに向かってアルミ箔で包んだ硫酸のボトルをぶつけて、そこに志向性を持った術式を掛け合わせる。

瞬間、発生し水素を媒介に水を喚び込まれる。俺の属性はあくまで 大気 なのでこうして媒介物で使わないと 水 は扱えない。

一秒と掛からず、バケツ一杯ほどの水が気体状になって爆ぜる。

走狗のうち二匹が巻き込まれて、壁に叩きつけられた。しかし悲

しいかな、行動不能するには所詮バケツ一杯程度の質量では足りないらしい。最初から期待はしていなかったが、単純な衝撃で殺すには不可能に近いようだ。

一旦土塊に戻った二匹は、しかし即座にその形体を再生。

より強靱に成った殻はさらに速度を上げて前の八匹とともに追走する。

「最悪……」

呟き、さらに加速する。

進化すら再現する擬似生命を創造できる魔術師など世に五人もいない。
まい。

だが相手である師は、世界の最先端のさらに彼岸にいるのだ。
この程度、造作も無い。

「動くんだつたら止められる筈なんだが……」

何せ構成骨子ごと分解してやっているのだ。
多少なりともダメージを受けて然るべき。
それでも、

未明の現実論は論理を超越することもある。

「あーメンドイ……」

階段を二段飛ばしで駆け上がる。

当座の目的地は二階の連絡廊下。

腰からナイフを一本抜く。

特に魔術的舗装も為されていない、単なるステンレスのナイフだ。
ホームセンターでも買える。

下手に魔女短剣アセイミーなんぞ取り出したら、こっちの組式が
乱れる。

それを左腕の……手首ではなく親指に押し当て、一気に引き切る。
俺にリストカットの趣味は無い。

僅かな痛みと共に肌が割、と裂けると紅い点が浮き出る。
点は球となり、走りの勢いでもって滴に変わり、夜の宙へと弾けた。

急げ。血は鮮度が命だ。ノロノロしていたら色が失われる。

最後の三段を一躍で越え、連絡通路へぶち抜ける。

「――！」
コンクリートの地面に転げながら血で描く紋陣は半径二メートル弱の三重円方。

背に迫る十狗十爪じゅつくじゅっそう。
この距離、外したらそれこそ自殺もの。

「Berter Earl Vehclipse Hibouss天へ
廻れ。圧力と鋼の風！」

剛風。

螺旋状の気流は竜巻のそれと同じ昇圧をもって、十匹の狗を叩く。

「――！」
「――！」

断末魔の悲鳴か、威圧の咆哮か。

囁々と唸る旋風はもろとも弾き、砂嵐と化す。

―― 砂嵐……？

微かな疑問に対する答えは背の衝撃。

鈍！

「——ッ!?」

衝突の勢いで体が前へと押し出される。

余りの唐突さに肺の空気がゼロになるが、訓練の賜物か、辛うじて頭を庇って受身を取った。

瞬間の判断——

「っらぁ!」

横のフェンスから身を投げる!

飛び降りるといつても精々二階の高さ、5メートルにも満たない。あの場に留まったら圧殺は必至。

——破乾!

下にあったアーケードで衝撃を吸収、着地と同時に走り出す。

反動が骨まで響くが、強引に無視。

「しまった……」

砂漠偉神セトに風と雷は効かない。

火と闇も大して効かないが、とりわけ大地と大気は無意味といってもいい。

砂漠偉神セトは神性として、およそ砂漠偉神セトは神性として水以外のほぼ全ての属性を内包しているのだ。

死すら取り扱う埃及の神々の中でも最強クラスの神。

打ち滅ぼせるのはそれこそ太陽神か隼空王神、紅砂女神ぐらいしかいまい。

河馬か驢馬か蛇がいれば牽制ぐらいできるが生憎とここは普通の高校であり、動物園ではない。

「となるとやっぱり水か……っ!」

砂の激流を側転で回避。

既に空気中に散った土砂が収束してひとつのカタチに戻りつつある。

一度粒子に還元されて得たカラダは蛇のようだ。

ナイル川のない高校でいたいどうやってあれに匹敵する水量をつけるか。

方法はないわけではないが、アレで果たして足りるかどうかいえば微妙。

「っ……！」

畝る砂の大蛇。その顎を辛うじてかわす。

ぼやぼやしている暇はない。

「H e s t e l , A l W i o r r d e b u r g c h a t

l 加速、我は尽きぬ風の如し」

身体加速の魔術を再度唱える。

コンクリートの道は目的地まで二百メートル続く。

その間に何が何でも十秒稼がなくては。

最初の一步から全速力で踏み出す。

奔る。

体重の倍近い圧力が体を締め上げるが構わない。

ここで停止したら待ってるものは死だ。

二百メートルを八秒で駆け抜ける。

フェンスの手前で跳躍。

そのままソコに飛び込み、ナイフでもって自分の肩を切りつける。

裂、と刃が筋肉の隙間に沈む。

重要なのは血液なのであって、肉体の損傷ではない。

可能な限り筋と神経に傷つけないよう細心の注意を払う。

音もなく散る血が黒闇のうちに溶けていく。

「っ……っば……」

息が苦しい。

時間が少ない。大急ぎで体に紋を刻む。

「ココではまともな詠唱も陣の作成も不可能。」

自身の四肢五臓六腑七点八極を世界に見立てる。

大魔術炉は星核。

式脈は張り巡らされた気流に。

あとは脳内で幻想を固定化する言を廻す。

濠。

俺の周りを囲っていたものが竜巻と共に天を衝く。

激流の勢いで砂蛇が俺のもと——水の存在しないプールへと突っ込んできた。

それを、手を空に固定したままプールの中を全速で駆け、逃げ回る。

ここからが体力勝負。

濠々と砂の瀑布が背中を圧迫する。

「お……！」

足が砂に絡めとられるが、ここで止まるわけにはいかない。

「あああ！」

巻き上がる砂粒。

全方位から身を叩く飛礫。

砂蛇は竜巻に満たされたプールの中で渦巻き、二重の螺旋となる。

砂塵と土塊は夜闇を舞い、月光は朱く染め上げられる。

風と砂の小世界を駆け巡ること約六秒。

蛇はその体の全てをこの限られた箱セカイに納めた。俺の体力もそろそろ限界。

ケリをつけるなら今こそその一瞬……！

残り少ない力を足に込め、プールから飛び出る。

右腕を天から地へ振り下ろし、告げる。

「D i b e r t e r 逆流しろ！」

竜巻は逆巻き、一瞬でダウンバーストと化す。

空間そのものを殴りつけたような衝撃とともにセカイが猛烈な嵐に沈む。

その風圧に、渦巻いていた砂蛇は一粒の例外もなく底へ押し潰される。

衝撃は先ほどの数倍。

しかし単純な破壊力だけでアレを潰すにはまだ足りない。

この程度の風、砂嵐をその身に封じる蛇には一時の楔でしかない。だがそれで十分。

仕掛けはこれから。細工は二段構え。

一拍の遅れとともにそれは落ちてきた。

轟オオオオ

…

激流。

水が面となってそのまま落下してくる…！

砂蛇が楔を抜くより早く、水は容赦なく元あった場所へと落ち、滝飛沫となって蛇を寸断する。

土砂は再生を試みるように収束するが、波濤によってすぐに崩される。

それも当然。

ただでさえ苦手な水に少量とはいえ、俺の血を混ぜてやったのだ。二つも異分子が混入しては精密さを求められる錬金の生命には耐

えられるはずもない。

泥水が波打つのを眺めて安心したのか、切った左肩が忸々、と痛み出した。

「っ…辛勝ってトコロか」

その安心も束の間。

まだ後片付けが残っているのを思い出す。

吹っ飛んだグラウンドに、完全に破壊された硝子窓とアーケード。

おまけに、プールの水と土砂の分離作業まである。

「面倒だよなあ……」

一人淋しく呟くと、見計らったようなタイミングで携帯が鳴った。ダルいので出たくないが、相手が誰か分かっている以上無視するわけにもいかない。

「もしもし……」

「九十九回目の鍛錬、合格おめでとう」

よく通る声。

からかうような口調で師は俺の合格を告げた。

「……どうも……」

「テンション低いなあ。いつもはカッチリしているお前らしくもない。」

ま、あんだだけ走ってりゃ疲れるのも当然か」

クク、と心底嬉しそうに云う。

人道主義の加虐嗜好者とはよく言ったものだ。師は俺を苛め抜くのが楽しいらしい。

「何を失礼な。弟子の成長を喜んでるだけだ…ガタガタ言っているとまた山の中に放り込むぞ」

「俺が悪かったです。マジで勘弁して下さい」

動く山の相手なんぞもう二度としたくない。

「そんな遠慮するなつて。夏あたりにもう一回、否が応でも相手させてやる。」

それは置いといて、だ……どうだった、今回の敵は？」

「強かったですよ、ホント。」

力でも速さでももつと強いのはいましたけど、総合的な強さならダントツです」

…そう。今回の敵は九十九回の鍛錬のなかでも間違いなく最強だった。

戦う場所がプールのある学校だったからよかったものの砂漠で勝負していたら確実に負けていただろう。

「フン、アレをあのカタチで破壊するつもりならそうだろうよ。」

お前は水と魔術師の血でもってアレを打倒したからな」

「？ …他に何か倒し方があるんですか、アレ？」

「当然だ。あれがいくら第五元素エリクシルを持っていたところで然るべき方法で封じれば余裕で勝てる。」

どうもお前は自分の魔眼の使い方を認識し切れていないな。いいか？

戦闘でお前が使える眼は四つのうち幽冥、風見、万里の三種類だ。アレが大狗審神アヌビスから派生させたエジプトの錬金術というのは間違いない。正解だ。

そこでまず見るべきは魔術の現象そのものではなく、術式の総体とその特性だ。

冬島、錬金術の特性といえバズバリ何だ？」

「そうですね…型に填まつてる所とか？」

「御名答。全くもってその通りだ。」

魔術の中でアレほど手順やら何やらがしち面倒臭いモノは基督教会の七大秘蹟ぐらいだな。

その分現象として成った時は強いが、現象に成る前に介入すれば

異分子を排除できず自滅する。

お前の失敗はな、冬島。

炭素の状態だったものをわざわざ、分解してダイヤモンドに組み替えさせたってコトだ。

最初からバケツ一杯なんていわずにプール一つ分の水を注いでれば、あそこまで苦戦する必要はなかったんだよ

お前がちゃんと

万里を使って相手の全容を把握し、

幽冥を使って相手の魔術を観察し、

風見を使って相手の組式を直視してれば余裕で勝てた。解るな？」

「はい……」

尤もなので、反論する気も起きない。

「邪眼と違って、お前の魔眼は飽くまでも受容器に過ぎない。

故に異視界層を引き出すぐらいしか、お前が魔眼に対してできることはない。

だがな。魔眼を持ち札としてどういう風にして切るかは他ならぬお前の判断に依る。

常に思考し続ける。ここが次善と納得した時点でお前は魔眼に負けたも同然だ。

あんまりソレをいい加減に扱うと——
逆に食われるぞ？」

謳うような嗤いに、息が止まる。

「っ……肝に銘じておきます」

「自己練磨を怠るなよ。

魔術師なら一戦のうちの一瞬も思考を停止することは許されないからな。

まあ……それにしたってお前は良くやってるだけだな。

塔の連中と比したところで遜色はない。上位一パーセント以内に

入るだろうさ。

今の協会は温いからな。

戦闘中にアレぐらい冷静に対処できるヤツは少ない。

今回のお前はテストの一問目で間違えたまま、他の部分を全答したってトコロだな」

「百点満点で三十点ぐらいですか」

「んにゃ、二十九点でやつぱり赤点」

ぐ。意地悪い……

「あ、そついやさ。俺の好きな数字って0の次に百なんだよ。

六百六十六でも七でも十二、十三でも魔術的にや意味あるんだろ
うけど、俺には無価値だし。

何でか解るか？」

「さあ十の二乗だからですか」

「いやいや。

百って如何にも人間くさい数字だろ。さっきの百点満点しかりお
百度参りしかり。

素数だの何だの下らねー考えの混じったものより余程人間らしい
からこそ、美しい数字だ」

「はあ…俺は一の方がいいと思いますけど」

「知ってるよ。お前一等とか好きだからな」

「師がソレを言いますか」

「ハ、最先端についてこれない方が悪い。

それは兎も角、次でお前の鍛錬は俺の好きな百回目だ」

随分な数だな。

「そこで優しい師匠は弟子にプレゼントをしたいと思うワケだ」

「結構です」

どうせ禄なモノであるまい。

「安心しろ。おまえがどうこう言おうとくれてやる。それも飛びっ

きりのヤツをな」

押し売りかよ。

「喧嘩は追加料金払ってでも買うべきだというのが俺の持論だ」

「何も言っていないんですけど」

「お前の顔見りや一目瞭然だ」

「前から気になってたんですけど、師はいつもどこで俺を見てるんですか」

「さあねえ……少なくともお前の知覚範囲の外であることは間違いないだろうよ」

半径十キロより外側か。

いや、自分の姿をあらゆる存在の印象から消し去ることぐらい、師は苦もなくやってのけるから分らないけど。

「ま、精進しとけ。」

あと今日は後片付けしなくていい。俺がやっといたから。ついでにお前の傷も全快させといた」

「え……？」

左肩を見ると、肌は確かに傷痕も残っていなかった。

「今日はいやに優しいですね……」

「フン、気にするな。」

何時、舞台の幕が上がるかなんて分からねーからな」

「……………」

師は自分の話したいことは言い尽くしたのか、一方的に電話を切った。挨拶の言葉もない。

「やれやれ……」

溜息を吐き、踵を帰して学校を出る。

名前も判らない月を仰ぎ見る。宵の空気は春にしては冷えている。

校庭に刻まれた戦いの跡は何時の間にか消えていた。

…

気が付いた時にはもう『幽霊』の類が見えていた。

一番古い記憶でも薄白い影が視界の隅に映っていたと思う。

『彼ら』とは、たまにしか視線は合わない。

いやそもそも数自体が少ないというのもあると思うけど。

兎も角普通言われているような「幽霊を見ると呪い殺される」ということもない。

向こうがこちらと関わることを望んでいないことがその雰囲気から判った。

まあ、ごく稀に話し掛けてくる奇特な奴もいたが。

通常の視界に重なり合うように映る霊的な視界は年を追う毎にその多様性を増した。

単純に視力が上がるだけではない。

生体の感情を色で識別する『裡視の魔眼』に、

事象の流れを読む『風見の魔眼』、

有名なところで『万里の魔眼』——と今だけでも四層の異視界を俺は持っている。

少なくとも全部で十種の視界を手に入れられる、と最狂の悪魔であり最悪の魔法遣いである師はそう給っていた。

「あと六種類、か…」

洗面台の鏡を覗き込み、黒い眼球に触れる。

偽物の眼は爪に当たり、カチカチと硬質な響きを返した。

姉の小夜香も風を視ることができたらしいがソレとコレは別物のだろう。

翠色に澄んだ姉の瞳とは違い、俺の瞳は墨のように何の光も反射

せず沈んでいる。

魔眼持ちだからといって、いいことばかりではない。

通常のそれと違って、俺の魔眼は何もしなくとも俺の魔力を食い潰し、どこかへと貯蓄していく。

強引に封印する手もあるが、脳まで絡みついた魔眼は封印した途端、右脳の感覚野の一部の機能を麻痺させるのだ。

日常生活には全くもって無用の長物どころか不法投棄された産業廃棄物並みに迷惑なのである。

師曰く「受容器たる眼としては正しい状態」であり、そうではなくは希少価値が無いらしい。

「……………。寝よ」

明日、いや今日も学校はあり、時刻ももう午前二時を過ぎている。

四時間しか眠れないが、それでも構わず布団へ潜り込んだ。

おやすみ、といえる家族のいない一人暮らしの部屋は静かで、古い時計だけが規則的に音を刻んでいた。

黒い風見鳥はゆっくりと眼を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0086b/>

雨月綺譚

2010年11月17日03時13分発行